

人間尊重とタイミングの倫理

― ケアの倫理からの新展開

早川正祐

はじめに

本稿では、他者を一人の人間として尊重する「人間尊重」について、ケアの倫理の立場から考察する。とりわけ、「本人のタイミングを尊重する」（以下では単に「タイミングの尊重」「タイミング尊重」と略することがある）という新たな観点から、ケアの倫理に基づく尊重論の充実化を試みることになる。より具体的には以下の三つのことを目指したい。第一に、ケアの倫理の発想を活かす「ケア倫理型尊重論」の大まかな輪郭を描き出す。第二に、「タイミングの尊重」という観点が、なぜ必須かを説明し、タイミングと自感情の深い関連性を明らかにする。第三に、ケア倫理型尊重論の拡充によつて、「タイミングの尊重を通しての人間尊重」というアイデアをどう取り込み、展開することができるのかを示す。

極めて大まかに言えば、倫理学の分野において「尊重」は、尊厳を有する自律的で理性的な人格（またはそ

れに類する存在) に対して採るべき態度として、しばしば捉えられてきた。むろん、尊重の対象とされる「尊厳」には多義性がある(ローゼン 2021 [2012]; 加藤・小倉・小島 2021; see also 会田 in press)。また、どのような存在が尊厳という価値を有するのかに関する見解も、倫理学者の間で一様ではない。だがそれでも、理性的な人格に対する態度として尊重を提える議論が、倫理学では一定の影響力をもってきた。

しかしながら、本稿では、そういった理性主義的な尊重論に対して、ケアの倫理の発想に基づく感情主義的な尊重論を展開する。米国の哲学者であるマイケル・スロートは、成熟した共感に基づく「感情主義的なケアの倫理」(sentimentalist care ethics) の立場から、尊重についての考察に着手した(スロート 2021 [2007])。スロートのケア倫理型尊重論においては、まずもって尊重されるべきは、「理性的存在者である『人格』であるよりも、感情豊かで傷つきやすい存在者、すなわち『生身の人間』なのである」(早川 2021, 249)。そして、相手が抱えた苦しみや不安に対する成熟した共感こそが、相手を一人の人間として尊重する「人間尊重」の核を成す(スロート 2021)。本稿もまたこの方向性を受け継ぐものである。

だが本稿では、スロートが切り拓いたケア倫理型尊重論に「タイミング」という観点を導入することで、その更新を試みることになる。私がこのような取り組みを試みる背景には、「タイミング概念の欠落ないし周縁化」という事態が、倫理学の諸分野において幅広く見いだされるという事情がある。例えば、現代の規範倫理学では、タイミングの適切さが、どのように行為の倫理的な適切さ(行為の正・不正の区別)や社会的正義に関わるのかということについて、主題的な考察がなされていない。少なくとも、主流の規範倫理学においては、タイミングの問題が、倫理や社会的正義をめぐる中心問題の一つであるとは明確に認知されていない。こういったタイミング概念の欠落は、尊重や尊厳についての倫理的考察にも同様に見いだされる(e.g., ローゼン 2021)。私の考えでは、この欠落は深刻な含意をもちうるがゆえに是正されるべきである。

以上の点を踏まえつつ、本稿では次のように議論を進めたい。第二節では、非常に大雑把にはあるが、理性主義的な尊重論との対比で、感情主義的なケア倫理型尊重論の枠組を提示する。第二節では、なぜ本人のタイミングを尊重することが、人間尊重にとって必要不可欠なのかを示す。第三節では、臨床におけるケアの事例をもとに共感の概念を、「時間感覚」の共有という観点から洗練化する。それによって、ケア倫理型尊重論を、タイミングの尊重という要請に適用ものへと更新する。第四節では、それまでの考察を踏まえて「解放尊重」という考えを導入し、人間尊重を、自律尊重としてのみならず解放尊重としても捉えることを提案する。

一 ケア倫理型尊重論の輪郭を粗描する

まずはスロートの議論を参照しつつ、感情を重視するケア倫理型尊重論の大枠がどのようなもののかを粗描しよう。この尊重論においては、当人の自律能力や理性能力の有無とは無関係に、個人の尊重が要請される。スロートは、カント的な理性主義的尊重論との対比で、自らのケア倫理型尊重論について次のように述べる。「カント主義者は、個々人に対する尊重を、その人の自律の尊重という次元で捉えることになる。……だが私はカント主義者による説明の順序を逆に見ようと思う」（スロート 2021, 85）。本節ではこの方向性の豊かな含意を明らかにし、さらに、愛のニードという観点からケア倫理型尊重論を部分的に補完しておきたい。

極めて大まかに言えば、カントの道徳哲学においては、「あらゆる理性的存在者が従うべき道徳律（道徳法則）を打ち立て、それに基づいて自己を律する」という意味での自律の尊重が、中心的なものとされる（早川 2021, 248）。¹ そこから、そのような自律へと開かれている理性的存在としての人間が尊重されることになる。もちろん多様なカント解釈がありうる。だが「法則に対する尊敬」（カント 2022 [1785], 126）と言われるよう

に、尊厳という価値——比類のない絶対的な価値——の源泉は、道德法則を打ち立てる自律能力にあり、それこそが尊重（ないし尊敬）の第一義的な対象なのである。すなわち、カント自身の言葉を用いれば「自律こそが、人間的な自然本性ならびにあらゆる理性的自然本性の尊厳の根拠」(ibid, 118)なのであり、また「人間性の尊厳はまさに、普遍的に立法するというこのような能力（自律能力）に存する」(ibid, 127)「内の補足は引用者」。こうして個々人は、その自律能力をもつ限りにおいて尊厳を有し尊重の対象になるとされる。ここでは「自律尊重」が、個々人を一人の人間として尊重する「人間尊重」よりも根源的なものだと考えられている。換言すれば、カント的な図式においては——もちろん別の解釈も可能だろうが——人間尊重は、自律尊重から派生するのである (see 石川 1995, 160)。²

しかしスロートは、この派生関係を思い切って逆転させる（早川 2021, 248ff）。スロートによれば、人間尊重のほうが自律尊重よりも根源的であり、自律尊重は、あくまでも人間尊重から派生し、それによつて制約されるべきものとしてある。このことが含意するのは、自律しているか否かとは無関係に、私たちは一人の人間として尊重されなければならないということだ。もちろん自律能力と言っても、その捉え方は様々だろう。上記のカント的な意味での自律能力の他に、より日常的な意味での自律能力がある。例えば、「自らよく考えて選択し、その選択に基づいて行動できること」や、「自ら計画・プロジェクトを定め、その実現に向けて自身のふるまいを理性的にコントロールできること」も、自律能力として捉えられるだろう。だが、いずれにせよ、スロートの方向性においては、こういった自律能力（ないし理性能力）の有無とは無関係に、私たちは個人として尊重されるべき価値を備えていることになる。例えば私が極度の老衰や重度の認知機能低下により、カント的な意味と日常的な意味のいずれにおいても、自律能力を大部分喪失したとしても、個人として尊重されるべき存在である点には変わりがないのである。本稿もまた、ケア倫理型尊重論のこの発想を受け継ぎ、カント

的または日常的に解された自律能力（あるいは理性能力）という枠組に縛られることなく、人間尊重について論じることになる。³

こういった（自律尊重に対する）人間尊重の優位性という発想は、多くのケア倫理学者によって暗黙理に受け入れられてきたものである。⁴ ケアの倫理を立ち上げたキャロル・ギリガンやネル・ノディングズは、私たちが、周囲の他者や社会によってケアされなければ——大切にされなければ——自分らしく生きていけないような傷つきやすい存在であることを強調してきた。彼女たちの考えによると、ケアするということは、相手から発される声に注意深く耳を傾け、相手がどのような状況を生きているのかを繊細に感受することや、相手のニーズに責任をもって応答することを含むのである。そこでは、「尊重」という言葉は積極的に用いられていないものの、「誰かしらに話を聞いてもらうことで各個人は尊重されなければならない」という考えや、また「自律的であるか否かにかかわらず、各人は尊重されるべき存在である」という考えが、暗に前提されている（Gilligan 1982; Noddings 1984; Kiray 1999; see also 岡野 2012）。

スロートの功績は、こういったケアの倫理に潜在する人間尊重の発想を明確に取り出し、人間存在の傷つきやすさを中心に据える形で、「尊重」という概念を豊かに捉え直した点にある。すなわち、ケア倫理型尊重論においては、人間尊重の要請は、自律能力を有する個人に対する「不干渉」や「不介入」という消極的責務（negative duty）の観点からではなく、傷つきやすさを抱える個人に対する「情緒的な関与」や「ケア」という積極的責務（positive duty）の観点から理解されることになる（スロート 2021, 89-90, 102）。私たちが傷つきやすい存在であるということは、各人が苦しみや不安を抱えやすい存在であることを意味している。それゆえ、本人が抱える苦悩に共感的に関わることを通して、人間尊重の要請に応答していくことが求められる。つまり、人間尊重についての考察は、人間の傷つきやすさを真剣に受け止めるものでなければならず、そうである以

上、個々人の尊重は、本人に対する不当な干渉を避けることはもちろん、本人に情緒的に寄り添うことをもしばしば要請するのである。だからこそ、成熟した共感に重きが置かれることになる。スロートによれば、ケアは成熟した共感に根ざすべきであり、「共感尊重」として不可欠な基礎である」(スロート 2011, 96)。つまり、成熟した共感に基づくことで、相手を一人の人間として尊重することが可能になるのである。

スロートの成熟した共感というアイデアをどう活かすべきかは、後に論じるとして、現時点で確認できるのは、ケアの倫理の発想に基づく感情主義的な尊重論が、カント的な発想に基づく理性主義的な尊重論とは、大きく異なる道筋を辿るということだ。確かに、ケア倫理型尊重論は未だ萌芽的であり十分には深められてはいない。例えば、「なぜ私たち各人は尊重されなければならないのか」という、尊重の根拠をめぐる根本的な問いに、スロートは明確に回答しているわけではない。しかし、この問いに関しても、スロートや他のケア倫理学者たちが、その回答の手がかりとなる重要な洞察を示してきた。その洞察によると、私たち各人は、「大切にされたい(愛されたい)」(need to be loved) もしくは「私の存在を大切にしてほしい」という愛のニーズを不可避に抱えている (Sloate 2013, 186-7)。

ここで私たちは、この重要な洞察に、「愛のニーズこそが、尊重の要請を生み出し根拠づける」というアイデアを付け加えることで、ケア倫理型尊重論を部分的に補完することができる。次のような仕方で考えることができるのではないか。「各人は大切にされる必要がある」という事実(ないし理念)から、「各人は単なる有用性を超えた、かけがえのない価値を有する尊厳ある個人として尊重されるべきだ」という尊重の要請が導き出される。愛のニーズは、「私の存在それ自体の価値(内在的価値)を認める仕方、私の存在を肯定し尊重してほしい」という尊厳の尊重のニーズをはらんでいるのである。もちろん愛には多義性がある。したがって、ここでの主張を支持するためには、さらなる議論が必要とされる。しかし、上記の理解は、愛のニーズに関す

一つの理解としてそれほど的外れではないだろう。この（部分的に補完された）ケア倫理型尊重論においては、尊厳の尊重という要請は愛のニードから派生する（see Frank 2013, chap. 2）。⁵そして愛のニードという情緒的なニードが根源にあることから、それは感情主義的な尊重論なのである。

おおよそこのような筋道で考えることで、感情主義的なケア倫理型尊重論の大枠が臆気ながら浮かび上がってくる。細部を抜きにした大雑把な言い方が許されるのだとすれば、次のように要約できる。理性主義的な尊重論において、尊重の要請を生み出し根拠づけるのは、本人が有する自律能力あるいはそれに類する理性能力である。そして、そこで主人公になるのは、理性的な自律能力を有し、それを発揮できる個人である。それゆえ、その本人の自律性に干渉しない「不干渉」の原則が、本人を個人として尊重する上で中心的になる。それに対して、（部分的に補完された上記の）感情主義的な尊重論において、尊重の要請を生み出し根拠づけるのは、本人が抱える愛のニードであり、その点で情緒的なニードなのである。そこで主人公になるのは、傷つきやすく苦悩を抱えやすい個人である。それゆえ、その個人の苦しみや不安に寄り添う「共感的な関わり」が、本人を個人として尊重する上で中心的になる。もちろん、以上の議論によって、尊重に関する感情主義的アプローチが理性主義的アプローチよりも優れているということが示されたわけではない。それどころか理性主義的アプローチは豊かな展開可能性を宿しており、性急に退けられるべきものではない。⁶だが少なくとも、ケア倫理型尊重論が、理性主義的尊重論とは異なる仕方、展開すべき豊かな可能性をもちうることは、以上の考察から明らかだろう。

まとめよう。理性主義的な発想では、自律能力やそれに類する理性能力を有することによって、私たちは周囲の人々や社会によって尊重されるべきだとされる。そして、その自律能力を、他者に干渉されることなく十分に発揮することで、その尊厳にふさわしい人間らしい生が可能になる。だがケアの倫理の洞察を活かすなら

ば、別のルートで可能になる人間らしい生もまた存在するのである。すなわち、私たちは周囲の他者（や社会）に愛され大切にされる必要がある。この愛のニードがあるからこそ、他者や社会によって尊重されるべきだとされる。そして、各人の苦しみや不安に寄り添う他者からの共感的な関与によって、その尊厳にふさわしい人間らしい生が可能になる。

二 タイミングと自尊感情

前節では、ケア倫理型尊重論の大枠を描出した。以降の節では、人間尊重の理念を、個々人のタイミングを尊重する「タイミング尊重」という観点から掘り下げ、タイミング尊重の要請に適うものとしてケア倫理型尊重論を充実化することを目指す。

本節ではまず、その充実化に先立って、なぜそもそも尊重論というものが、タイミングという要素を考慮しなければならないのかを明らかにしたい。既に指摘したように、従来の尊重論においては、タイミングの重要性が中心的な主題となるまでには至らなかった。それゆえ、本稿のタイミング重視の立場に対して、「果たして、タイミングをめぐる問題は、尊重論において考察に値するテーマなのか」という疑問が投げかけられるかもしれない。そこで、なぜタイミングが人間尊重の議論において主題化される必要があるのか、その点を示したい。

最初に次の点を押さえておこう。ある対人実践が、その相手を尊重する実践であると言えるためには、その実践は、相手の自尊感情を傷つけるようなものであつてはならない。つまり、「私は尊重されるべき大切な存在だ」という、本人の自尊感情の維持・形成に資する限りにおいて、その対人実践は、「本人を尊重している」

と言える（会田 2019, 81-2）。⁷ もちろん、厳密には、もつと細かい規定が必要とされるだろうが、おおその方向性として、この考えは理に適っていると思われる。実際、たとえある人が相手のためを思ってやったことでも、それが相手の自尊心を深く傷つけるものであったなら、相手を尊重しているとは言い難いだろう。

この点を踏まえた上で、本稿の議論の核となるアイデアを付け加えたい。すなわち、私たち各人は、周囲の人々（または組織・社会・制度）によって、自分自身のタイミ^{、、、}ングが大切にされ尊重されているとき、自分の存在が大切にされ尊重されていると感じられ、自尊心が保持される。反対に、周囲の人々（または組織・社会・制度）によって、自分のタイミ^{、、、}ングが長期にわたり蔑ろに^{ないがし}されている場合は、自分の存在もまた蔑ろにされていると感じられ、自尊心がそのぶん損なわれる。このような仕方では、本人の自尊心の形成と保持は、「周囲の人々や社会によって本人のタイミ^{、、、}ングが尊重にされているかどうか」にも左右される。

ありふれた事例で考えよう。例えば、花子は大量の家事と育児を一人で担わされており、その結果、自分自身の「今・ここでしたいこと」は常に後回しにすることを余儀なくされる。すなわち、花子自身が望むタイミ^{、、、}ングで、休養をとれない、友人と遊べない、映画を見に行けない、キャリア・アップや資格取得に向けた勉強もできない。また例えば、「子どもが体調不良でその看病が求められる」といった不測の事態が生じたときは、その当日に親友との久しぶりの再会が予定されていたとしても、夫の太郎のスケジュールがなぜか優先され、彼女がその不測の事態に対応することを強いられる。その結果、彼女のスケジュールの方がいつも犠牲になってしまう。そこでは彼女自身のスケジュールやタイミ^{、、、}ングは不当に蔑ろにされている。このような状況が続けば、花子が「自分自身の存在があまり大切にされていない、あまり尊重されていない」と感じるのは自然なことではないだろうか。そして、それによって自尊心が傷つくのではないだろうか。

こういったタイミ^{、、、}ングの問題は、日々の具体的なコミュニケーションの場においても顕在化する。上記の想

定において、花子は、現状改善をすべく自らの苦境を太郎に伝えようと試みる。しかし太郎は、「今は仕事が忙しいから」「今やっていることがあるから後で」といつも花子の話を後回しにする。もしくは、花子の話が少しでも長くなると、太郎は「また後でいいかな」と言ってしまう。その結果、花子は太郎に話を聞いてほしいまさにそのタイミミングできちんと話を聞いてもらうことができない。また花子がその日に起こった他愛もないことを共有したいと思い、太郎に話しかけようとしても、太郎が忙しそうな素振りを見せるため、花子は自分が望んでいるタイミミングで太郎に声をかけることができない。このように日々のコミュニケーションにおいて、自分が話を聞いてもらいたいタイミミングで聞いてもらえないという状況が続くと、花子は「自分は太郎によつて大切にされていない」という思いが募り、自尊心が傷つくのではないだろうか。

以上で取り上げたのは、日々の生活の細々としたこと、つまりミクロな出来事に関するタイミミングであつたが、同様のことが人生の節目となるようなマクロな出来事に関するタイミミングについても当てはまるだろう。例えば、ある両親は、「まだ就職しないの?」「結婚はいつするの。早くしたほうがいいよ」「孫の顔を早く見たいな」等の言葉を、子どもに繰り返し浴びせかけることで、就職・結婚・出産といった人生を左右する大事な事柄に関するタイミミングを、その子に不当に押しつけてくるかもしれない。このように、もし私たちが人生における大事な出来事Xに関して、「今、あなたはXに向けて努力すべき」「あなたは早くXすべき」といった世間からのメッセージに恒常的にさらされ、その大きな圧力によつて、自分自身が望むタイミミングでXに関連する活動にとりかかることが困難になるなら、どうだろう。また制度や慣習が、そのような形でタイミミングを押しつけてきたらどうだろうか。そういうことが頻繁に起こると、「私は社会のメンバーとしてきちんと迎え入れられていない」と感じられ、「私という存在があまり大切にされていない、尊重されていない」と感じられるのではないだろうか。だとすれば、ここでも、自分自身が望むタイミミングが繰り返し軽んじられることで、

自尊感情が傷つく可能性があることになる。

以上から示唆されるのは、相手を一人の人間として大切にし、尊重するためには、その本人のタイミングを大切にし、尊重することが求められることである。例えば、花子は、周囲の他者から当然受けるべき配慮や援助を受けることによって、彼女自身が望むタイミングで、休養をとったり、キャリア・アップに向けた勉強もしたりすることできるようになり、さらに日々のコミュニケーションにおいても、自らのタイミングで感情や意向の表出ができるようになったでしょう。このように花子自身のタイミングが周囲の他者に大切にされ尊重されることで、「自分は大切にされ尊重されている」という感覚が花子の内に芽生え、自尊感情もまた涵養されると考えられる。

もちろん、上記の議論によって示唆されているように、本人のタイミングがどれだけ尊重されるかは、本人を取り巻く慣習や制度によつて大きく左右される。花子が被っているタイミングをめぐる不正義、あるいは花子と太郎の間にあるタイミング格差——（周囲の人々や社会にタイミングを押しつけられることなく）自分にとつて大事なことを、どれだけ自分自身の望むタイミングで行うことができるかに関する格差——の背後には、人間尊重の理念に真つ向から反する性差別的慣習・制度があるはずだ。花子のタイミングの尊重のためには、それらの是正が求められるだろう。例えば以下のように清水晶子によつて構想された、女性一人ひとりのタイミングが尊重される社会では、花子は「自分自身が大切にされ尊重されている」と（以前よりも）感じるようになるのではないだろうか。

若いうちに出産や育児を経験した女性たちが、教育を中断せずすむ、あるいは必要な時間をおいた上で再び学びを継続することを容易にする体制をつくる。いったん何らかの仕事についた人が、その経験を活

かしてさらに関連する分野について深くあるいは広く学ぶ機会を用意する。仕事をしながらその横で自分の興味や関心のある分野を学びたい人たちのために、そのような教育を提供する場と、そのような学びを継続できる労働環境の双方を整えていく——人生を送るなかで、何らかの知識を身につけたり、何かを考へたりする必要がある、あるいはそうしたいと希望する人々が、各々のタイミングでアクセスできる教育の場や機会をどのように確保するのかを、社会全体で考えていくことが大切です。(清水 2021, 186) 強調は引用者)

清水は、多様性の尊重という文脈で上記の指摘をしているが、多様性の尊重が、各人を一人の個人として尊重する人間尊重の理念の具体的かつ本質的な展開だと考えるならば、清水のここでの洞察は、人間尊重をタイミングの尊重から考察する目下の論考と深い関連性をもつと言える。

さて今や次のようにまとめることができる。私たちの生においては、日々の対人関係から世間・組織・制度との関係に至るまで、タイミングという要素が遍く浸透している (see Fuchs 2001)。だからこそ、様々な関係性の中で自己実現をしていく私たち各人にとって、自分のタイミングが尊重され正当に扱われているかという問題は、切実な意味をもつ。そして本節で見たように、周囲の他者や社会が、本人のタイミングを尊重することによって、本人の自尊感情が維持され、尊厳に適う人間らしい生が可能になる。第一節で取り上げた愛のニードと結びつけると次のように述べることができるだろう。人間尊重の要請の根源にある「私の存在を大切にしてほしい」という愛のニードは、「私のタイミングを大切にしてほしい」というタイミングをめぐるニードを宿している。それゆえ、人間尊重の要請に根本的な仕方では応じるためには、タイミングをめぐるニードを満たす必要があるのだ。

三 成熟した共感に基づくタイミングの尊重

前節で見たように、本人のタイミングを尊重する「タイミング尊重」は、本人を一人の人間として尊重する「人間尊重」にとつて欠くことができない本質的な要素だと考えられる。だとすれば、人間尊重の理論は、「いかにしたらタイミング尊重の要請に応じることができるか」を説明できるだけの理論的な豊かさを、備えていなければならないことになる。この理論的豊かさはいかにして可能になるのか。私の回答は、「ケア倫理型尊重論を拡充することによつて」というものである。とりわけ、ケア倫理型尊重論における「成熟した共感」の概念を、他者の時間感覚に対する鋭敏な感受性という観点から新たに掘り下げることで、「タイミング尊重の要請はどのように満たされうるか」をいくらか説明することができるようになる。その骨子は次のようなものだ。成熟した共感的配慮によつて、苦悩を抱える相手の時間感覚に寄り添うことができるようになり、自他の時間感覚のズレが改善される。そのことを通じて、相手のタイミングが尊重できるようになる。そして相手は、自分のタイミングを尊重されることで、自分の存在も尊重されていると感じられるからこそ、相手の自尊感情が形成・維持される。

まず、このような私の立場が、成熟した共感というスロートのアイデアをどのように受け継ぎ発展させたものなのかを説明しておこう（なお、ここでのスロートの共感の説明に関しては早川（2021, 242-3）の叙述に基づいて加筆している）。スロートによれば、共感には、相手自身の観点から世界がどう感じられ体験されているかを受け止める姿勢が要求される。換言すれば、共感には相手を感じているものを感じようとする姿勢、さらには「相手が見ているものを見ようとする姿勢」（石垣 2012, 25）が必要なのである。だから、こういった相手の観点（perspective）に配慮することなく、例えば相手に対して「かわいそうだ」「みじめだ」と一方的

に同情したとしても、それは共感にはならない。「共感的であるためには、相手の置かれている状況を、（私自身の関心ではなく）相手自身の関心に照らして、きちんと理解し感じ受け止める姿勢が求められる」（早川 2021, 242）。

このことは、成熟した共感においては相手の個別的な観点が尊重されなければならない、ということの意味している。スロートによれば、私たちが相手に共感するとき、相手は自分とは異なる観点——感じ方や見方また関心やニーズ——をもつ別個の人間であるということの感覚が保持されていなければならない（スロート 2021, 89-90）。それゆえ、成熟した共感とは、自他の観点を混同することなく、相手の個別的な観点に敬意を払い尊重することを要請することになる（*see also* Coplan 2011）。かくしてスロートの考えでは、成熟した共感こそが、人間尊重の核となるのである（スロート 2021, 89-90, 93）。すなわち「誰かを尊重するという態度が成立しているのは、その人への対応において、その人に適切な共感的配慮を示す場合、かつその場合に限る」（*ibid.*, 89-90）。

この洞察を下敷きにしつつも、私はここで、他者の時間感覚の尊重を含むものとして、成熟した共感を捉え直したい。スロートによれば、成熟した共感とは、自他の観点の相違に配慮しつつ他者自身の観点を尊重するものである。ここで留意すべきは、（これから実際に見ていくように）「観点」（*Perspective*）というものが、当人の時間感覚によつて根本的に規定されているという点である。それゆえ自他の観点の相違に配慮しつつ他者の観点を尊重することは、自他の時間感覚の相違（ズレ）に配慮しつつ、他者の時間感覚を尊重することを含むのである（*see* Ratcliffe 2012, 134）。¹⁰ スロートが主張するように、成熟した共感とは、人間尊重にとつて核となるが、なぜそうなるのかと言えば、成熟した共感によつて、他者の時間感覚を尊重できるようになり、さらにはそのことを通して、タイミング尊重の要請に適う仕方では、相手を一人の人間として尊重することができるよ

うになるからだ。

以下では、この点を明らかにするにあたって、自他のタイミングや時間感覚のズレといったものへの対応が際立った重要性をもつ臨床の場面を取り上げたい。これから見ていくように、優れた臨床ケアの実践には、ケア倫理型尊重論が取り込むべき豊かな知見が潜在している。そして、その場面での考察を経由することで、成熟した共感が果たす重要な役割を具体的に理解できるようになる。そしてさらに言えば、ここで得られる洞察を、臨床以外の日々の尊重実践の考察に拡張していくことができると私は考えている。

そこで以下では、臨床ケアの具体例をもとに考察しよう。以下は看護ケアの分野で著名な石垣靖子が、ある患者Cさんに対する自らのケア実践について振り返っている場面である。その叙述においては共感・時間感覚・タイミングといった言葉は用いられてない。だが、そこでは石垣の共感的な感受性がいかんなく発揮されており、私たちは石垣のケア実践を分析することで、「タイミングの尊重を通じた人間尊重が、いかに共感によつて可能になるのか」という問いに関する、重要な手がかりを得ることができる。

五〇代の隣臓がんの男性患者、Cさん。「痛みが緩和しない」と、いつも不機嫌で主治医にも激しく痛みを訴えることがありました。私たちが客観的に見ても最善の痛み治療をしているように思いましたが、Cさんは痛みを訴え続けるのです。ある日、私は医師の回診について行きました。そのときもCさんは主治医に対して、「ここは痛み治療の専門病院だと聞いてきたが、少しもよくならない」と不満を仰っていました。

回診の後、私はCさんのベッドの横に腰掛け、言いました。「痛みがつらいですね……」。「そうなんだ。こんなに痛くては何もできない」。「そうですね……」とCさんのつらさを受け止め

ようとして、私は自然にCさんの背を抱くように手を回しました。Cさんは一瞬ぎくつと身体を固くしましたが、私はそのまま肩を撫でていました。

そうしているうちに、Cさんはぼろぼろと涙を流したのです。私もなすすべもなく、もらい泣きをしなが、しばらくそのままでした。「見苦しいところを見せてしまいました。……実はここに来るときに、あとひと月くらいいのちであること、臓腑がんの痛みは治療しづらいこと等を聞いていました。先生がとてもよくしてくれるのに……」と涙ぐんで話されます。「そうでしたか」。私ははじめてCさんの胸の内を聞くことができました。「最後に一度だけ（自身で経営していた会社の）事務所に行ってみたい」とCさんは仰いました。

ご家族とも相談し、ある日スタッフ付き添いのもと、Cさんは事務所に行きました。車いすで事務所をひと回りしてじつと見渡し、「もういい。帰る」と言つて、無事病院に戻ってきました。それから人が変わったように穏やかな表情になり、痛みの訴えはほとんどなくなりました。（石垣 2012, 24）

まず、石垣の共感的な実践について分析するのに先立って、問題となっているCさんの状況を、Cさん自身の時間感覚という側面から簡単に確認しよう。Cさんは、今まさに感じている激しい痛みによって意識を占有され、苦しい現在から抜け出せなくなっており、それゆえに「痛みを訴え続けている」（ibid.）。このようにCさんの意識が苦しい現在の只中にとどまっている点を踏まえて、Cさんの時間感覚を「現在停留的な時間感覚」と名づけることができるだろう（早川 2022b）。Cさんにおいては、現在停留的な時間感覚が支配的になっており、心身の健康を享受している人々が保持している、現在から未来へと歩みを進めていくような時間進行の感覚——「未来前進的な時間感覚」と呼びたい——は希薄になっているのである（Frank 2013; Fuchs 2001; 早

川 2022b; トラン 2015; Rarcilffe 2012)。¹¹

さて、このようなCさんの苦境に対して石垣はどのように対応しているのか？ まず、ここでの石垣の共感的態度が、激しい痛みによって希望をもてずにいるCさんの時間感覚に寄り添うものであるという点に注目したい。石垣は、まず「痛みがおつらいですね」（石垣 2012, 24）とCさんに言葉をかける。そして、そのあとも、Cさんが体験している「苦痛に満ちた現在」に共に踏みとどまり、それを分かち合うことに専心している。そこでは、「前向きにがんばりましょう」といった、未来への前進を促すような発言は、慎重に控えられている。つまりここにあるのは、自らの未来前進的な時間感覚（前向きな態度）を当然視し、その時間感覚に同期することを、相手に強いてしまうような「抑圧的な同期化」の試みではない。むしろ、石垣は、Cさんの苦しみに身をさらすことを通して、自らの時間感覚を変容させることになる。すなわち、苦しみの只中にいるCさんの現在停留的な時間感覚を鋭敏に感受し、それに自らを馴染ませている。そのことによって、石垣とCさんの間にある時間感覚のズレもまた是正されていく。こういった「受容的な同期化」による時間感覚の共有こそが、成熟した共感の本質を成すのではないか。この受容的な同期化においては、石垣の側がCさんの時間感覚に寄り添い同期化するため、Cさんは、あくまでも自身が望んでいるタイミングで、気持ちや感情を吐露したり、また意向を伝達したりすることが可能になるのである。そして、Cさんはこのように自分の時間感覚が大切にされ尊重されることで、「自分のタイミングが大切にされ尊重されている」と感じることで、さらには「自分の存在がきちんと迎え入れられ大切にされている」と感じることもできるようになるだろう。そして、それがCさんの自尊心の再形成や維持につながることは想像に難くない。このように成熟した共感を、「相手の時間感覚に対する鋭敏な感受を通しての自他の時間感覚の共有」として新たに捉え直すことで、どのような形で、成熟した共感が「タイミングの尊重を通しての人間尊重」に貢献するのかを理解することができ

るようになる。

さらに、この実際の事例とは正反対の想定をすることで、上記の主張により説得力を与えたい。例えば他の医療者——Aと名づけよう——が、自らの未来前進的な時間感覚を当然視し、それを自明な規範とするとしよう。その場合は、前向きになるようにCさんを無理に励ますということが生じかねない。もちろん励ますことは悪いことではない。しかし励ますのにもタイミングが肝心なのだ。Cさんが、容易には抜け出せない苦しみの只中にあることを考慮するならば、その段階で「前向きにがんばりましょう」とCさんを励ましてしまうことは時期尚早であり、Cさんにとってはタイミングが早すぎるのである。もしAが、この時点でCさんをそのように励ましてしまえば、Cさんは「そんな簡単に前向きになれないほど苦しんでいるのに、どれだけ苦しいかが受け止められていない」と思い、Aへ不信感を抱いてしまうかもしれない（早川 2022b, 132）。そして、そのような不適切なタイミングでの励ましが続けば、Cさんは「Aによつて尊重されていない」と感じるようになるだろう。ここでは共感がうまく働いていないため、Cさんの時間感覚が感知されておらず、その結果、自他の時間感覚のズレが放置されることになる。こうして不適切なタイミングでの励ましがなされることになるのである。

このように共感的な感受性がうまく機能するかどうかによつて、「相手の時間感覚が共有され、相手のタイミングが尊重されることになるかどうか」が左右され、さらには、「自分の存在が迎え入れられ、尊重されている」と、相手が感じることでできるかどうかも左右されることになる。以上のように見ることで、いかにして成熟した共感によつて、「タイミングの尊重を通しての人間尊重」が可能になるのかについて、一定の理解を得ることができる。

さて今や本節の問いに（おおよその）回答が与えられたので、最後に一つだけ重要な点を補足しておきたい。

それは、石垣の共感的なケアの実践自体が、チーム医療という共同実践に埋め込まれることで可能になっている点である。石垣の周りには、彼女と連携・協力してCさんに対応する複数の医療スタッフがいるはずだ。このことは、「タイミングの尊重を通しての人間尊重」が、個人単位ではなくチーム単位になって、はじめて可能になることを示唆している（早川 2022b, sect. 7）。それゆえ、ここで要請されるのは、共感的な個人というよりは共感的なチームであり、さらにはそのような共感的なチームを可能にする共感的な組織や制度なのかもしれない。

この点は、ケア倫理型尊重論における尊重の捉え方を考慮しても支持されるだろう。もし人間尊重の要請が、自律能力を有する個人に対する「不干渉」や「不介入」という消極的責務しか意味しないのなら、尊重実践は、個人単独でも容易にできるかもしれない。しかし第一節でも触れたように、ケア倫理型尊重論においては、傷つきやすく、苦悩を抱えやすい個人が主人公であり、それゆえ、そういった個人を尊重することは、その個人に対する情緒的な関与やケアといった積極的責務との関連で理解されるのである。この意味での尊重実践は、個人単独でするには、明らかに負担が重すぎると言える。それゆえ、尊重実践は共同化されなければならない、尊重実践に疲れた個人が自ら望むタイミングで安心して離脱できる環境を、組織の側は整えておく必要がある。¹²

さて、本節で見てきたのは、私たちの傷つきやすさには時間的な側面があるということであつた。すなわち、私たちが傷つきやすく苦悩を抱えやすい存在だということは、私たちのあり方を根本的に規定している時間感覚が変調をきたしやすいうことを意味するのである。病苦に限らず、苦しみや不安は、程度の差こそあれ、本人の意識を現在へと固着させることで、本人が未来の可能性へと希望をもって関心を向けるのを妨げる（早川 2022b, 124-5）。この時間感覚の脆弱性こそが、従来のケア倫理学者たちが人間存在の傷つきやすさを強調

しつつも、十分に注意を向けなかった側面なのである。そして、ここに注意が向かないからこそ、タイミングの問題も取り逃されてきたのではないか。いずれにせよ、本人の傷つきやすさを考慮するケア倫理型尊重論は、本人の時間感覚を尊重するものでなくてはならない。本節で論じたのは、成熟した共感こそが、そのような尊重を可能にするものだということなのである。

四 自律尊重と解放尊重 — 結語にかえて

これまでの議論の流れを振り返ろう。第一節では、ケアの倫理型尊重論の大まかな輪郭を示し、第二節では、タイミングの尊重がなぜ人間尊重において重要な位置づけをもつのかを明らかにした。第三節では、「成熟した共感」の概念を掘り下げること、ケア倫理型尊重論を、タイミングの尊重という要請に適用ように改訂した。最後に本節では、共感的感受性が、苦しみや不安からの解放としての自由の生成を促すという点、あるいは、その苦悩を形作っている感じ方や見方から解放たれることとしての自由の生成を促すという点を確認したい。

前節の事例（とりわけその最後の部分）を思い出そう。Cさんは石垣との共感的交流を通じて、苦痛に満ちた現在から徐々に解き放たれ自由になっていく（石垣 2012, 24）。ここでは「自律的な自由」とは異なる「解放的な自由」の生成を見てとることができる。この点は、人間尊重論や尊厳論にとつて極めて重要な含意をもつ。というのも、それは人間尊重を、自律尊重（respect for autonomy）としてのみならず、その手前にある解放尊重（respect for liberation）としても捉える道を切り拓くものだからだ。理性主義的尊重論が「自律尊重」を中心に据えるのに対して、感情主義的なケア倫理型尊重論は、「解放尊重」を中心に据える。このような見

方に少しでも説得力を与えるために、(前節で論じた)「共感を介した「時間感覚の共有」が、どのような性格をもつものなのかを見てみよう。

まず強調したいのは、ここでの時間感覚の共有は、静的な共有ではない点だ。つまり、それは「Xが共有されても共有されるXは変化を被らずに同一な状態にとどまる」といったような静的な共有ではない。むしろ、時間感覚の共有自体が、共有される時間感覚そのものを変化させずにはいられない。その意味で時間感覚の共有とは、動的な共有に他ならない。実際、目下の事例では、Cさんの現在停留的な時間感覚が石垣によって共有されることで、共有されているその時間感覚自体が、徐々にではあるが、未来に開かれたものへと変容していく。一方の時間感覚の変容が、他方の時間感覚の変容を触発するのだ。このような自他の時間感覚の相互触発と相互変容こそが、ここでの動的共有の正体であり、共感的交流の内実なのである。¹³成熟した共感とは、この時間感覚の協働的生成を始動させ維持させるものだと考えられる。

そして重要な点は、こういった共感における時間感覚の動的共有が、解放的な自由を生成させるという点だ。Cさんの側にもたらされる時間感覚の変化を、解放という観点から記述し直すことができる。すなわち、石垣がCさんの現在停留的な時間感覚に同期しそれを共有することで、Cさんの意識は、苦痛に満ちた現在から徐々に解き放たれ自由になっていく。その結果、Cさんは未来に開かれ、「最後に一度だけ(自身で経営していた会社の)事務所に行く」(石垣2012, 24)という計画も立てることができるようになるのである。だとすると、共感による時間感覚の動的共有は、解放的な自由をもたらす上で本質的な働きをしていると言える。おおよそこのような仕方で共感の働きを豊かに捉え直すことで、ケア倫理型尊重論における人間尊重を「解放尊重」として捉える道が拓けてくる。

もちろん、ここで提示したのは、大まかな見通しにすぎず、この提案を実質的なものにするためには多く

の議論が必要とされる。だが、「人間は傷つきやすく、それゆえ苦しみや不安を抱えやすいし（Cさんの事例）、不当な抑圧にもさらされやすい（花子の事例）」といった人間観を前提にするならば、人間尊重を、そのような苦悩や抑圧からの解放を志向する「解放尊重」として捉える方向性は、それほど外的ではないだろう。それゆえ、尊重や尊厳を論じる際に依拠すべき概念枠組として、「自律」という枠組に加えて、「解放」という枠組をひとまず提案することで、論を閉じたいと思う。¹⁴

■文献

- 会田薫子 (2019). 『長寿時代の医療・ケア——エンドオブライフの論理と倫理』、ちくま新書。
- 会田薫子 (in press). 「人間の尊厳——臨床現場で考える「尊厳」の意味」、日本救急医学会編『救急診療指針改訂第六版』。
- Coplan, Amy. (2011). "Understanding Empathy: Its Features and Effects." In *Empathy: Philosophical and Psychological Perspectives*, eds. Amy Coplan and Peter Goldie, 1-18. Oxford University Press.
- フランク、アーサー・W. (1996). 『からだの知恵に聴く——人間尊重の医療を求めて』井上哲彰訳、日本教文社。(As the Will of the Body: Reflections on Illness, Mariner Books, 1991)
- Frank, Arthur W. (2013). *The Wounded Storyteller: Body, Illness & Ethics*, second edition, Chicago University Press. (『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』鈴木智之訳、ゆみる出版、二〇〇二年)
- Fuchs, Thomas. (2001). "Melancholia as a Desynchronisation: Toward a Psychology of Interpersonal Time." *Psychopathology*, 24: 179-86.
- Fuchs, Thomas. (2013). "Temporality and Psychopathology." *Phenomenology and Cognitive Science*, 12: 75-104.
- Gilligan, Carol. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Harvard University Press.
- 早川正祐 (2021). 「訳者解説——感情主義的徳倫理学から共感的なケアの倫理へ」マイケル・スロート著『ケアの倫理と

共感』早川正祐・松田一郎訳、二三三～五九頁、勁草書房。

早川正祐 (2022a). 『臨床におけるケアの倫理——混沌の語りから』、清水哲郎・会田薫子・田代志門編著『臨床倫理の考え方と実践——医療・ケアチームのための事例検討法』、九四～一〇二頁、東京大学出版会。

早川正祐 (2022b). 『意思決定支援の倫理とカイロスの共有——本人の時間感覚に寄り添う』、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター編『死生学・応用倫理研究』第二七号、一二三～四九頁。

Hayakawa, Seisuke. (2022). "Illness Narratives and Epistemic Injustice: Toward Extended Empathic Knowledge." in *Knowers and Knowledge in East-West Philosophy: Epistemology Extended*, ed. Karyn Lai, 111-38, Palgrave Macmillan.

石垣靖子 (2012). 『看護における倫理を考える』、石垣靖子・清水哲郎編著『臨床倫理ベーシックレクッスン——身近な事例から倫理的問題を学ぶ』、一～三四頁、日本看護協会出版会。

石川文康 (1995). 『カント入門』、ちくま新書。

カント、イマニエル (2022 [1785]). 『道徳形而上学の基礎づけ』、御子柴善之訳、人文書院。

加藤泰史・小倉紀蔵・小島毅 (2021). 『東アジアの尊厳概念』、法政大学出版局。

Kitay, Eva Feder. (1999). *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*. Routledge. (『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』岡野八代・牟田和恵監訳、白澤社、二〇一〇年)

マラン、クレール (2015). 『私の外で——自己免疫疾患を生きる』、鈴木智之訳、ゆみる出版。(Hors de Moi, Editions Allia, 2008)

Noddings, Nel. (1984). *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*. University of California Press.

岡野八代 (2012). 『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』、みすず書房。

Ratcliffe, Matthew. (2012). "Varieties of Temporal Experience in Depression." *Journal of Medicine and Phenomenology*, 37: 114-38.

ローゼン、マイケル (2021). 『尊厳——その歴史と意味』、内尾太一・峯陽一訳、岩波新書。(Dignity: Its History and Meaning,

Harvard University Press, 2012)

清水晶子 (2022). 『フェミニズムってなんですか?』、文春新書。

スロート、マイケル (2021). 『ケアの倫理と共感』 早川正祐・松田一郎訳、勁草書房. (The Ethics of Care and Empathy, Routledge, 2007)

Sloce, Michael. (2013). *From Enlightenment to Receptivity: Rethinking Our Values*. Oxford University Press.

■註

1 本段落と次の段落における説明は、スロートの議論についての私自身による解説＝早川 (2021, 248-9) をもとに加筆したものである。

2 言うまでもなくカントの尊重論（ないし尊厳論）はとても豊かなものである。本節で提示する理解が極めて部分的なものである点を断っておきたい。

3 このように本稿ではケア倫理型尊重論を採用することになるが、だからと言って、理性主義的アプローチを退けるべきだと私は考えているわけではない。理性主義もまた豊かな可能性をもっている。本稿の立場を明確にするためにも、この点は強調しておきたい。実際、ここで争点となっている自律能力や理性能力を、環境や他者への依存を認める形で広義に解釈することによって、より穏健な理性主義的尊重論を採用することもできる。例えば（上記の想定において）私が体調不良で食欲がなかったとする。にもかかわらず、介護者が私に夕食を食べさせようと、スプーンを私の口へともってきてたら、私は顔をしかめて嫌がる表情をするかもしれない。そのとき、私は「顔をしかめる」という身体行為を通じて「食べたくない」という意思を表示している。そして、私はその意思表示によって、夕食を無理やり食べさせるという行為を控えるべき「理由」を、介護者に対して表示している。このような理由表示能力において、私は理性能力をもち自由を行使しているから、自律的であると言えるかもしれない。そして、ここで行使されている理由表示能力＝理性能力はやはり尊い、私にはそう思われる。このように理性主義を充実にしたものにすることができる。したがって本稿の目的は、理性主義的な尊重論を退けることにあるのではない。むしろ、理性主義の豊かな可能性を認めつつ、それと同様に豊かな可能性をもちうるものと

して、「感情主義的なケア倫理型尊重論」という異なる方向性を打ち出すことを目的とする。そして、その目的のために、「カント的ないし日常的な意味で自律能力を解する限りにおいては、自律尊重に対して人間尊重が優位性をもつ」という限定された形で、人間尊重の優位性を示すことができれば十分だと考える。

例えばギリガンやノディングズらのケア倫理学者たちは、自らの議論を提示する際に、「尊重」という概念を中心的なものとして用いなかった (Gilligan 1982; Noddings 1984)。それは、それなりの理由があつてのことだと思われる。倫理学の分野では、尊重という言葉は、自律の尊重という仕方では、人間の理性的性格の価値と深く結びつけられ理解されてきた。それゆえ、人間の情緒的なニーズに着目するケア倫理学者たちは、理性主義を連想させる「尊重」という言葉を用いるのを避けてきたのだと考えられる。

「愛の要請」という発想に関しては、スロート以外にもアーサー・フランクにも負っている。ただしフランクは愛を、ニード (要請) の次元ではなく欲望 (余剰) の次元で捉えている (Frank 2013: chap. 2)。しかし私の考えでは、ニードの次元は、既に欲望 (余剰) の次元を織り込んでおり、愛のニードとは余剰のニードに他ならない。この点で私の見解はフランクの見解と異なっている。とはいえ、フランクの議論から私は非常に多くのことを学んできた (Hayakawa 2022; 早川 2022a; 早川 2022b)。

既に指摘したように、スロート自身は、このような形で愛のニードを尊重論と明確に結びつけるまでには至っていない。だが私の考えでは、この愛のニードこそが、ケア倫理型尊重論がその根底に据えるべきものである。そして付言すれば、ケア倫理学者が強調してきた「人間の傷つきやすさ」は、この愛のニードに部分的には起因するものだと考えることができる。私たちは、周囲の他者によって大切にされることを必要としている。この愛のニードゆえに、ひどい扱いを受けたとき、私たちは傷つくのではないだろうか。

臨床の文脈ではあるが、会田薫子は次のように述べている——「医療・ケア従事者が患者や利用者の尊厳を維持するとは、医療やケアによって、本人が自らに価値があると感じることができるようになること、本人の自尊感情や自己肯定感を高め、本人が自分のあり方を肯定できるようにすることである」(会田 2019, 81-2)。この重要な点は、尊厳の尊重が、自尊感情と密接に結びつく形で解釈されている点である。私は、この会田の解釈を、臨

床の文脈に限定されない、尊重実践一般に妥当するものとして採用したい。

8

タイミングというものが、生命体としての人間にとって本質的である点に関しては Fuchs (2001; 2013)。ただし私は、タイミングの問題は、(花子の事例からわかるように) 同時に社会的正義の問題であることを強調しておきたい。

9

「私は周囲の他者や社会に大切にされることで、自らの尊厳に適う生き方ができるのか」——これこそが、愛のニードを抱える私たちにとって最大の関心事の一つだろう。そして、そのような尊厳に適う生き方が可能かどうかは、私たち各人のタイミングがどれだけ大切にされ尊重されるかにも左右される。それゆえ、タイミングへの私たちの関心も切実なのである。

10

マスー・ラトクリフは精神疾患の現象学の文脈で、これと関連する点について (ごく簡潔にはあるが) 言及している。ラトクリフによれば、「時間体験の緒形態の間にある微妙な相違に対して敏感になることは、患者に対する共感能力を高め、患者の孤立感を和らげるのに役立つかもしれない」(Rachleir 2012, 134)。私も同様の立場に立つ。ただし私の考えでは、時間感覚の相違に敏感になることは、共感に貢献する何かというより、それ自体、共感の中心部に位置する構成要素なのである。そして、なぜそう言えるのかを、ここでは概念的な観点から示しているつもりだ。また以下では具体例を用いてその点を明らかにすることになる。

11

例えば、自己免疫疾患に悶え苦しんだときの体験を、クレール・マランは次のように語っている。

自分の苦痛の中に、責め苦である自分の身体の中に、病いにとりつかれ、苦しみに占領された頭の中に閉じこもっている。病人はもう、他の人と同じようには話さない。もう、未来形で活用する文章には慎重になるしかない。……将来への自発的な投影は存在しない。思考の跳躍は、身体の跳躍とともに、その生命の分節化にのしかかる見えない重みによって妨げられている。(マラン 2015: 26、傍点による強調は引用者)

マランは、まさに今、我が身を襲っている苦痛や不安に苛まれ、支配されているがゆえに、未来に向けて計画を立てたり、約束をしたりすることができない。また、健康な人々と同じように将来について前向きに話すことができない (see also Frank 2013, xv; フランク 1996 [1991])。

12 感情労働や離脱に関して、重要な指摘をしてくださった佐藤静さんに感謝します。

13 共感における協働性や自他の相互変容という点に関しては、宮原克典さんとの共感に関する共同研究から多くのことを学んでいる。感謝申し上げます。

14 この論文を作成する過程で、会田薫子さんからたくさんの貴重な助言や励ましをいただいた。心より感謝いたします。

(はやかわ・せいすけ 東京大学大学院人文社会科学系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座特任准教授)

Respect and the Ethics of Timing: A Care-Ethical Approach

Seisuke Hayakawa

The element of timing is ubiquitous in social life. It ranges from daily interactions to relationships with organizations and institutions. Notably, the just and respectful treatment of one's timing is of fundamental significance. As others and society respect one's timing, one's sense of self-respect can be maintained, and a dignified life is more likely.

Foregrounding the significance of timing, the study intends to demonstrate how respecting the timing of another individual is prominently situated in the practice of respecting them as human beings. Particularly, it elucidates the salient role of empathic caring in respecting another person's timing and in thereby paying respect to them as human beings. In doing so, this paper provides an updated care-ethical account of human respect.

The discussion proceeds as follows. By drawing on the pioneering work of Michael Slote on care and respect, Section 1 outlines a care-based approach to human respect. Section 2 explains the reasons for respecting the timing of another person for them to be fully respected as human beings. Section 3 discusses how one can meet the demand of respect for the timing of another person. In particular, it argues that empathic caring enables respect for one's lived sense of time, and thereby helps respect another individual in a manner that meets their demand for respect for opportune timing. Section 4 reveals the manner in which a successful

practice of respect can enhance freedom as a form of liberation.